



Title	二十周年回顧の一端
Author(s)	吉田, 鋭雄
Citation	懐徳. 1936, 14, p. 59-71
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88952
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

て少しでも體得したなれば、少しでも行はれる道でございます。取分けて書道に親しむ人には、斯の道が尤も必要缺くべからざるものと思ひます。

終りに臨んで斷つて置きます。前に幾度も漢學と申しましたが、是は日本で言ふ漢學の事で、宋學に對する漢學ではございませぬから御承知を願ひます。(終)

二十周年回顧の一端

吉 田 銳 雄

開堂式と定期講演

懷德堂重建以後、早や二十年の歲月は流れた。回顧すれば私が懷德堂勤務の辭令を受けて、始めて堂に登つた時は、開堂式を行ふ前一月、即ち大正五年九月十五日で、講堂も事務所もたゞ外廓が出来たのみで、内部の設備着手に大混雜の最中であつた。使丁室には糟谷といふ老夫婦の小使が居るばかり、事務を執るにも紙も筆もない有様なので、是から俄に世帶道具を買集めたり、電話や瓦斯管の敷設交渉やら、開堂式舉行の準備に、日々大多忙を極めたが、終にめでたく十月十五日盛大なる開堂式

が舉行せられた。

さて式は滞りなく済んだが、直に講義講演を開くことは出来ない、第一専任の教授がまだ確定して居ない、次に基金がそれ程集つて居ない。當時永田理事長の談によると、第一次は十五萬兩、第二次は三十萬兩、第三次は五十萬兩——理事長は口癖で兩と言はれた——といふ風に、漸を逐ふて義金を募り、以て基礎を確立し事業を擴張して行くといふ計畫であつた。今日の状態は殆ど所謂第二次計畫までに漕ぎ付けて居るが、開堂當時は建築費に一萬五千餘圓を費した爲に、殘額は幾何もない。理事長の所謂第一次計畫には程遠いものであつた、それで度々理事會や評議員會が開かれ、開講の準備をする一方、義金の募集に奔走される等、早忙の裡に經過したが、中にも理事兼講師であつた西村碩園先生は、嬉しさの餘り一日も早く開講したくて堪らなかつたらしい。講義講演等の規則課目など、それぞれ理事會にかけて決議されることを促進され、定日講義の方は教授確定の後とし、先づ以て定期講演——現在は土曜講演と改稱し、大正九年四月以降毎週土曜に開き、講師二人が隔週交互に毎回一人出講することになつたが、當初は隔週土曜、即ち毎月二回、講師は毎回二人、京都帝國大學文學部の教官を聘して公開とす。——を開きたいといふ提議で、遂に其の年の十一月四日を以て、其の第一回が開かれた、講師及び演題は文學博士狩野直喜先生の孟子概説、同三浦周行先生の國史新話であつた。此の講演は今日と同じく、幾回かの連續講演で、大學の講義と同様、何れも學究的のもので、大

學の衍長であるかの如き感を懷かしむる、誠に大阪の市民に取りては、一寸他に類のない有難いものであるが、さて此の講演を開く旨を新聞紙上に發表して、當日愈々蓋を開けると、實に豫想外の大盛況、文字通り滿堂立錫の地もなかつた。

現在の大講堂は、南北兩小講堂との間の鴨居の上は板張になつて、一寸不格好に見ゆるが、元來これは無かつたもので、板張は定日講義を聞くやうになつて、急に設けたものである。最初は大集會の場合には、此の取合の戸を外して一大講堂にする仕組であつたが、是は失敗であつた、會毎に斯る重い戸を一々取外しすることは、不便極まるものであつたからである。併し最初は其の經驗がないから、此の豫想外の聽衆に面喰つて、俄に重い戸を外すやら腰掛を運ぶやら、西村先生の如きは、自身で其の手傳をされ、誠に恐縮したことであつたが、先生はさも満足氣に、あの童顏に笑を湛えて居られた。かくして、定期講演は毎回盛況の裡に續行され、今日に及んで居るが、此の時の費用の如き或る部分は西村先生が四五回分、堂へ醸出されて、それで以て繼續することが出來たものである。現在此の聽講者は約三分の二が定連といふものになり、他の一分が新來で、百名乃至五十名、懷德堂の事業中一番成功したものである。

開講式と定日講義

さて専任教授は、廣島高等師範學校教授松山直藏先生と確定して、同教授は大正五年十二月二十六日來阪、居を聖天坂に定められた。而して翌六年一月二十七日いよいよ開講式が舉行せられた、同教授は當日大學の首章を講じ、西村先生は「聽講生諸君に告ぐ」と題して、一場の講演があり式は終り、是より定日講義が開かれることになった。

是より先、聽講生の募集をしたが、其の結果は西村先生が非常に心配された——今日の如き漢學衰微の世に、聽講生が来るだらうか、小講堂を使用して、定員四十名を入れる豫定になつて居るが果して此の定員を満すであらうか、兎も角開いた以上は、教授を初め講師たるものは、空堂に於ても講ずる、といふ意氣と覺悟とを要する、と語られて居た——所が此の心配は忽ち解消して了つた。六日目の應募締切當日の總計は、何と二百六十四名の多數に上つた、應募者の様子を見るべく日々登堂された西村先生の如きは、意想外の應募者に目を圓うして驚かれ且つ喜ばれた。

かくて翌日は、應募者の選擇に就て理事會が開かれたが、結局申込者全部二百六十四名を許可することになった。開講當日は尙六名増して總計二百七十名となった。そこで定日講義は小講堂に於て開くといふ當初の計畫を變更するの餘義なきに至り、定期講演と同じく大講堂に於て講義することに決定した、其の爲に机の不足を來し、俄に机を注文するやら、前記の如く大講堂と小講堂との鴨居の上に板を張るやら、大騒ぎをして、遂に同年二月一日午後七時より定日講義の第一日を開始したのである。

現在は基金の増加に伴ひ、定日講義は月曜より金曜に至る五回に増加した、尤もこれまでに成るには、何か特別に研究する人の爲にとて、水曜日に特科講義、東西兩洋の哲學文學を講ずる爲に金曜日に文科講義、中等學校の學生の爲にとて、日曜朝講といふものを次々に設けたが、何れも此方の目的希望に副はない結果になつたので、すべて是等の煩はしき名を廢して、一律に定日講義と名づける事になつたが、當初は毎週二回、即ち月曜と木曜とであつた、課目及び講師は松山教授と西村講師とで、月曜は松山教授の論語、西村講師の經子簡編、木曜は西村講師の同じく經子簡編、松山教授の禮記纂言抄で、各々一時間づつ擔當された、其の第一日の出席者は、二百七十名の中百九十三名で、約七割強の出席率で、大講堂は滿員の盛況であつた、併し是は所謂珍らし物喰の一時の現象に過ぎなかつた、回を重ねるに隨ふて、次第に減少し、其の年の九月第三期の始めには、在籍者百二十八名にして、出席者は七十二名、第二年の翌大正七年第一期始には、在籍者六十九名にして、出席者四十九名、是れから以後は略ぼ其の數が確定したものらしい、固より時により多少の増減はあるが、在籍者數は毎期六七十名、出席者は其の半數を上下して居る。

此の出席率の少なくなつた理由に於ては、大に考ふべきことだと思ふ、或る人は言ふ、講師其の人によると、斯く言はるれば吾々は固より一言もない。併し一面を見ると、他に幾多の理由が存在するのでなからうか、第一本堂の講義は、徳性の涵養と學術の研究とを以て宗旨として居る、爲に幾年聽

講しても、資格を得るものでないから、何等物質的方面の恩恵がない、實は間接的に其の恩恵を受けて居るが、脚下が暗い爲に判らぬ、第二には本堂の聴講費は月僅に二十錢で極めて低廉である、これも最初は無料にするといふ議もあつたが、それでは出入度なく却て弊があるとして、電燈料の一分を足す意味で、堂費と名づけて少額を取ることにした、此の聴講費が至廉なる爲に、一寸覗いて見て直ぐ止める人が多い、第三に聴講生は何れもそれ／＼職業に従事して居る人である、疲勞した身體を以て、尙精神生活に精進しようといふには、餘程の勇猛心を要する、随つて今日の様に一週五回も開いて居ると、如何に好學と雖も、毎夜登堂することは困難である、爲に一週一回若くは二回、自己の欲する課目のみを聴くといふ風になるので、自然擇り喰が甚しくなる、實際聞いて見ると、此の傾向の人が大部分を占めてゐるやうで、やはり最初の週二回の方が通學し易いといふ人もある、其の他教科書の難易、講義の方法、本堂の位置等、幾多の理由もあらうが、先づ是等が聴講者の減少を來した重なる原因であるまいか、併し是は近視眼的の見方で其の最も大なる原因は、他に存在する。今之を議することは止めるが、兎も角一方に漢字廢止論を唱へるものがあり、漢學本來の面目を知らぬ人が多い爲に、今日漢學を唱道し鼓吹するには、中々の骨折である、併し幸に好學の士も少なからず、開堂以來聴講する人、即ち二十年繼續聴講生として表彰するもの四名あり、十年、七年若くは五年三年の繼續者も相當に在る、吾々は敢て出席者の多少を論ずるものでない、假令數は少なくても、只此の聖

賢の道を樂んで、他を顧みざる士の登堂せんことを望んで止まない。

中井竹山先生は、其の懷德堂記に於て、斯の堂に登ることを欲する人と欲せざるものとを左の如く舉げられた。

欲_下好_レ學樂道、潔_レ身受_レ物、論議風采、表_二見一時者、就_中斯席_上矣。

不_レ欲_下誤_レ國之臣、敗_レ家之子、姦回暴棄、爲_二三世笑僂者、來就_上焉。

欲_下居_レ家孝友、接_レ人敬和信讓、而御_下下有_レ恩者、躋_中斯堂_上矣。

不_レ欲_下剛愎自用、頑率驕傲、凌_二長上而虐_二幼賤者、來躋_上焉。

欲_下守_レ業安_レ分、勤儉明恕、而清廉好_レ義者、升_中斯階_上矣。

不_レ欲_下瀆_レ貨貪_レ財、鄙吝自私、不_レ恤_二人言_一者、來升_上焉。

欲_下釋_レ經紬_レ史、操_レ觚濡_レ翰、其才可_レ育者、履_中斯庭_上矣。

不_レ欲_下目無_二一丁一、鄙語妄談、片言不_レ及_二義者、來履_上焉。

或資質恬澹、靡_レ甘_二世味、雅尙自適之餘、討_レ儒問_レ奇之等、與_二夫下士晚覺、循迂

守拙、踴勉肄_レ業、作輟有_レ時之倫、而入_二斯門_一矣、在_レ所_レ不_レ厭_上也。

儻酒斯酒、色斯耽、昏昧荒蕩、敗_レ風亂_レ俗之輩、與_下夫逞_二私智、騁_二殊見、跖弛任誕、

誣_レ聖蔑_レ賢之徒、而來入_上焉、不_レ得_レ不_レ距_上也。

吾々の欲不欲も竹山先生と同様である。世皆濁らば己れ獨り清からん、人名に奔り利に趨かば、我は獨り仁に依り義に據らん、然らば假令數は少なしと雖も、斯の堂を愛して斯の道を樂む人々に對しては、眞に滿腔の敬意を表するものである。

回顧が思はず感慨に外れたが、言はざれば腹膨るゝ業、偏に大方の支援と鞭撻とを仰ぐ次第である。

通　俗　講　演

大正八年になり、豫て願ひ出て居つた府市兩廳からの補助金が下附される事になつたので、更に一般市民の常識を養ひ品性を向上せしむる目的の下に、通俗講演を開く議が起り、該講演委員會なるものが組織されて、たび／＼協議の結果、遂に該講演は、堂内の講演と出張講演との二種とし、毎月一回適當の日に行ふ事となり、其の第一回は同年六月二十一日の土曜日本堂内に於て開催、阪口昂博士の「尊敬すべき實業家グロート」、片岡直溫氏の「予が大阪に就職以來經濟界の所感」と題する講演があり聴講者二百三十三名で、是れ亦盛大を告げた。出張講演の方は、同年九月二十日西區九條第一尋常高等小學校に於て開いたのが最初であつたが、其の翌十月十八日該講演の第四回を南區御津尋常小學校に於て開いた時であつた、有澤潤博士の「遺傳と眼病」、西村先生の「商賣人の學問所」と題する講演であつたが、折柄當日は、該區域が誓文拂の爲雜開して居り、且つ通告の方法に少し手落があつ

た爲に、聴講者が極めて少なかった、僅に三十餘名、而も其の大半は小學生であつた、是には西村先生大に氣を腐らせられ、もう出張講演は止めやう、といふ事になつて、遂に此の以後即ち第五回以後は専ら堂内に於て行はれる事になつた、而して此の講演も、定期講演と同じく、二人の講師が午後七時から九時まで各一時間づつ出講したが、同十年一月より大阪町人學者の講演を行つてから、一人の講師が午後七時から一時間半若くは二時間出講することに改めて今日に及んで居る、聴講者數は土曜講演よりやゝ少ないのを例とする。

さて序ながら此の大阪の町人學者の講演に就ては、私には千載の痛恨事がある、即ち此の時の講演には、左記の演題の下に各講師が各々其の搜訪に係る研究を發表せられた。

木村兼葭堂を憶ふ

(一月)

西村時彦先生

山片蟠桃を憶ふ

(二月)

内藤虎次郎先生

高橋作左衛門父子の事蹟

(三月)

新村出先生

上田秋成に就て

(四月)

藤井乙男先生

橋本宗吉に就て

(五月)

土屋元作先生

草間直方に就て

(六月)

今井貫一先生

富永仲基に就て

(十一月)

内藤虎次郎先生

尾崎雅嘉に就て

(十二月)

吉澤義則先生

而して其の際は小講堂に於て、其の都度遺書遺物を展覽し、且つ正面に畫像若くは墓碑の搨本を掲げて、其の前に卓を設け香爐を置き、聽講者に參拜せしむるやうにした、此の墓碑の搨本や遺物の借用には、其の都度私と矢壁書記とが、一々其の寺に出張して搨本を取る、また一方各藏弃者に就て遺物の借用をする等、相當人知れぬ苦勞を重ねたものである、而して是等の講演筆記は、東京の某書店が出版する事になつて居たので、該講演速記の原稿は各々講師の校閲を経、また畫像や墓碑遺物の二三點を各寫眞板に附し全部整理編纂の上、原稿を書店に郵送したのであつた、所が同十二年の關東大震災で焼失して了つたのである、複本を取つて置けば宜かりしにと後悔したが後の祭、折角苦辛したのも一朝にして水泡に歸して了つた、私自身としては今でも惜しい事をしたと、思ひ出の種になるものである。

尙惜むべき事といへば、今一つ傳ふべき事がある、序を以て茲に記して置く。

何年であつたか忘れたが、多分通俗講演委員會の度々開かれた頃であるから、大正八年頃の事である、一夜堂門に掛けてある看板を盜まれた、木材も刻字も現在の看板と同様のものであつたが、是は開堂當時臺灣總督府から二三樟板の寄贈を受けたので、其の内一枚を看板に使用して、懷德堂の三字を刻した、此の字はもと三宅石菴先生の筆に係るもので、舊懷德堂の玄關に掲げられた横額であるが、

それを双鉤に取つて豎に刻した、刻者は京都の山本竟山翁で、原書と些も違はぬ實に美事なものであつた、それを盗み去られたのであつた、其の翌日登堂した松山教授も私も、誰も門を過ぎながら心付かずに居たが、成田幹事が登堂されて、看板を何うしたのだと問はれ、始めて皆が氣がつき、早速警察へ届け出たが、遂に行方知れずに終つた、そこでまた同様の樟板があつたから、再び額字を双鉤に取り、西野田職工學校に頼んで、無料で雕つて貰つたのが現在の看板である、竟山翁今や則ち亡し、而して形見の看板も失はれた、惜むべき一事である、因に竟山翁に此の看板を頼んだ時に、竹山先生自筆の懷德堂記をも刻することを依頼した、此の方は同翁の門人某が此の記文を原書から双鉤に寫し、同じく樟板に刻したもので、非常に丹精を凝して出来たものである、是は講堂内に掲げる筈であつたが些か故あつて今に掲げず、其の儘書庫内に納めてある、竟山翁は之を聞いて、闇から闇へ葬むるとは哀しい、門人に對して氣の毒に堪へぬと泣かれたさうであるが、是は無理もないことだと私は竊に思つて居る。

素 讀 科

素讀科を設くることになつたのは、大正六年三月になつて理事會が開かれ、句讀師を聘すること並に素讀生募集方法及び同規則につき協議せられ、其の結果句讀師は、もと大分師範學校に教鞭を執られて居た波多野七藏先生を聘することになり、同年五月一日素讀科始業式を南小講堂に於て舉行了た、入門生十八名で父兄の附添ふもあつた、松山教授、西村講師から一場の訓話があつて後、神位を禮拜

し、終つて素讀生に茶菓を與へて式を終つたが、始業は三日の木曜から始められ、開宗明誼章第一と高らかに朗讀する聲が窓から漏れて、道行く人の耳を聳てるやうになつた。

先生は資性恬澹寡欲、頗る快活な老人で、咸宜園に學んで詩を善くせられた、授業の暇餘、能く私を執へて、舌嘗めづりつゝ手振面白く昔話をされたものである、所が居ること三年餘、衰老の故を以て退職せられ、東京に閑居されて居たが、竟に昭和三年十月逝去された、先生退職後は私が其の後を掌當して今日に及んで居るが、同先生の時までには、月謝として金壹圓也を徵集して居たが、私が代つてからは理事會の決議により月謝を徵せざることになつた。

規程は滿十八歳までの中小學生に、孝經四書を授けることになつて居るが、特に希望の向は年齢を問はず入門を許して居る、今の世に孝經四書の素讀を習ふものがあるかと、能く奇異の眼もて尋ねる人があるが、此の二十年間未だ曾て素讀生の絶えたことのないのを見ても解る、最も少ない月でも五人はある、多い時は二十人を超過して、一人で擔當するのに困つた時もある、堂の方では素讀を終つた後は、聽講生となつて勤學するやうに勧めて居るが、併し是は其の數甚だ少なく、大抵は學校の豫習を理由として、途中で廢するものが多い。併し其の父兄に於て漢學の素養あるか、或は漢學修養の必要を感じ、父兄が其の子弟を同伴の上入門せしめたものは、能く二年三年と繼續し、更に進んで五經十八史略など讀了する子弟もある。

結

語

以上本堂の事業中、其の重なるものに就て回顧を試みた、その他、日誌を繙いて見れば、幾多思ひ起す材料あり、殊に物故教授講師や功勞者の事蹟に就き陳ぶべき點も多いが、何分にも暑氣甚だしく筆は中途で休止する、頭が混亂して叙事蕪雜を免れぬ、故に僅に事業の一端を記して、茲に責を塞ぐことにした、偏に寛恕を乞ふ。

終に一言す、二十年といへば長いやうではあるが、遠き將來に比すれば實に一瞬時たるに過ぎぬ。

舊懷德堂は享保九年より明治二年まで繼續し、百四十六年にして廢學の運命となつたが、西村先生は其の著懷德堂考に於て、此の間を區分して、石菴整菴兩先生の時代は草創時代、五井蘭洲先生時代は培養時代、竹山先生時代は最も隆昌を極めた擴張時代、碩果寒泉兩先生の時代は保守時代と名づけられた。今假に時勢を考へずにこれを比較して見ると、現懷德堂は漸く創業時代を経て、將に培養時代に移らんとする過渡期に在るが如き感がする。吾人は益奮闘努力して、大に培ひ且つ養ひ、以て精神生活の上に發展向上を期し、微力なりと雖も大に四方の俊髦を養成して行かなければならぬと思ふ。何分にも精神生活の方面は、算へることの出来ぬ目に見えぬものであるから、他の事物の如く數字的に其の効果を示すことは出来ないが、假令少數の人なりとも、感化影響を受けて居ることは信じて疑はぬ、心ある人士、それ來り遊べ。

(九月一日記)